

# 十津川警部 長良川心中

## 新装版

西村京太郎  
*Kyotaro Nishimura*

### 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

#### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。



目次

|     |          |     |
|-----|----------|-----|
| 第一章 | 鶉飼いの夜    | 7   |
| 第二章 | マネージャーの男 | 34  |
| 第三章 | 心中か殺人か   | 61  |
| 第四章 | 睡眠薬ネルトンN | 91  |
| 第五章 | 過去への旅    | 117 |
| 第六章 | 視点を変えて   | 146 |
| 第七章 | 終局への犠牲   | 176 |



十津川警部 長良川心中



## 第一章 鵜飼いの夜

### 1

五月に入ると、長良川で、恒例の鵜飼うかいが始まる。鵜飼いは、長良川以外でも、木曾川などで、行われるが、長良川の鵜飼いは、ほかに比べて、二つの点で、違いがある。

第一は、歴史の古さである。

長良川の鵜飼いは、今から千三百年前、西暦七〇二年から、今まで連続として続けられてき

たという歴史がある。

第二は、長良川の鵜匠の身分である。現在、山下、杉山両家にいる鵜匠は、六人で、いずれも宮内庁の職員で、正式な名称は、宮内庁式部しきぶ職しよく鵜匠である。

五月十五日、東京の出版社が出している雑誌「旅ロマン」の編集者、木本信雄と、カメラマンの井上有紀の二人が、長良川の鵜飼いの歴史と、その美しさ、楽しさを取材するため、午後の「こだま」で、東京駅を出発した。

二人とも、長良川の鵜飼いは、写真では知っていたが、実際に、見たことはない。

新幹線の中で、木本は、長良川の鵜飼うかいについて書かれたパンフレットに、目を通していたが、

「とにかく、歴史があつて、古いらしい。何し

ろ、今から千三百年も前の、西暦七〇二年から始まっているといわれているからね。古い行事なんだ」

と、木本は、隣席の有紀に向かって、やたらに、古いを連発した。

「西暦七〇二年というと、日本では、いつ頃の時代かしら？」

「六七二年が壬申じんしんの乱だから、それから三十年後だね」

「じゃあ、飛鳥あすか時代？」

「そうだろうね。八年後の七一〇年に、飛鳥から平城京に都が移っているから。面白いのは、鵜匠には、男しかなれないから、女の子が続けて生まれると、跡継ぎの問題で、困ったらしいね」

「男しか継げないというと、古い家元制度の中

で、同じようなことがいわれているわね。歌舞伎では、男しか歌舞伎役者にはなれないし」

「それに、戦争中も、長良川の鵜飼いは行われていて、今いったように、男しか、鵜匠になれないから、山下家と杉山家に生まれた男は、戦争中も、兵隊には、取られなかったらしいよ」

そんな話をしていっているうちに、二人の乗った「こだま」は、岐阜ぎふ羽ふ鳥は島しま駅に着いた。

駅前からタクシーを拾って、二人は、予約しておいた岐阜都ホテルに向かった。

タクシーは、長良川の土手に作られた道路を、走っていく。

木本は、携帯の天気予報を見ていた。多少の雨でも、鵜飼いは、行われるだろうが、できれば、晴れてくれたほうがいい。どうやら、今日いっぱい、天気もつらしい。

三十分ほど走って、タクシーは、岐阜都ホテルに、到着した。

長良川の鵜飼いを、見物することは、都ホテルに伝えてあったので、フロントで確認すると、「お客さまの乗る屋形船の予約は、お取りしておきました。ただ、二名様だけなので、大きな船に、ほかのお客様と、相乗りということになってしまいます。それでもよろしいでしょうか？」

フロント係は、丁寧な口調で、木本にきいた。「それで結構です。むしろ、取材だから、ほかのお客さんと一緒のほうが、面白い話が聞ける」

と、木本は、いい、

「何時頃、出発したらいいんですか？」

「乗船は、五時半からということになっており

ますから、その少し前に、タクシーに迎えに来るように、手配しておきました」

「ここから、乗船場までは、どのくらいかかるの？」

横から、井上有紀が、きいた。

「そうですね、車で、五、六分といったところですね」

と、フロント係が、いった。

「夕食は、その屋形船の中で、取れるようになっているんでしょうね？」

「はい。そのように、手配しておきました」

「どんな夕食なの？」

「松花堂弁当に、天然のアユも焼いてくれます。もちろん、ビールや、お酒、ウーロン茶などの飲み物も、用意されています」

「それで、五時半に、乗船して、鵜飼いが始ま

るのは、何時なの？」

井上有紀が、きくと、

「鶉飼いは、暗くなつてから、始まりますので、現在は、七時半ということになっています。それまでに、ゆつくりと、お酒を飲んだり、食事をしたりしていただきたいのです」

フロント係が、教えてくれた。

五時半に、タクシーが迎えに来て、二人は、出発した。

タクシーは、長良川に掛かる橋を渡る。船着き場は、都ホテルとは、反対側にあるのだ。

二人が船着き場に着いた時には、大型の屋形船が何艘も並んでいて、すでに、乗船が始まっていた。

急な石段を降りていくと、そこが、船着き場になっている。

客を乗せた屋形船は、次々に、岸を離れていく。

船外機が、ついているのだが、船首の部分には、男が二人、乗っていた。背中に、大きな名前を染め抜いた半纏はんてんを着て、頭に鉢巻はちまきを、巻いた男衆である。

男たちは、長い竹竿を持ち、それを微妙に、操りながら、船の進む方向を、決めていく。

船は、上流に向かって走っているので、それほど、スピードは出ていない。そんな、ゆつくり進む屋形船を、小さな、といつても、長さは十三メートルはあるという細長い船が、猛烈なエンジン音を、響かせて、追い越していった。

船首の男衆の一人が、大声で説明してくれる。

「今、追い越していったのが、鶉匠の乗った鶉船で、ご覧になったように、三人乗っています。

頭に、烏帽子えぼしを載せ、腰蓑こしみのをつけているのが鶉匠で、真ん中とちゅうにいるのが中乗り、いちばん船尾に乗っているのが、艦とちゅう乗りです。暗くなると、篝火かがりびに火がつき、全部で、六艘の鶉船が、一斉に長良川を下ってきます。篝火のある方が、船首ですから、今は、上流に向かって、船首と船尾を反対にして走っています」

「鶉匠さんが、乗った船は、どのくらい上流に行ってしまうわけ？」

有紀が、カメラのシャッターを、押しながらかく。

「かなり上流まで行きますよ。そこから一斉に、松明たまつをつけ、鶉を、泳がせながら、長良川を下ってくるんです。どうしても、先頭の船のほうが、アユを獲とりやすくなりますから、順番を、くじ引きで決めるんですが、順番を決めた後で

船を、方向転換するのは、難しいので、今のよう、船尾を前にして、上流に上っていき、そのまま、今度は下ってくるわけです」

「いろいろと知っているのね」

「感心したように、有紀が、いった。

男衆は、笑って、

「何しろ、もう何年も、この、仕事をしていすからね」

「ねえ、名前を教えてくださいませんか？」

「うみしまです。海という字に、鳥と書きます」

「海島さん。面白い名前ね」

有紀は、笑ってから、

「あなたたちのことは、何と、呼べばいいのかしら？」

「そうですね、何と、呼んでくださっても結構ですが、一応、正式な名前は、船員ということ

になっています。この船には、船長が一人と、船員二人の合計三人が、乗っているわけです」  
 何分か、上流に向かって進むと、澱よどみになっているようなところが、あった。そこに、客の乗った屋形船が、次々に集まってきた。

お客たちは、停船した船の上で食事をしたり、酒を飲んだりしながら、鵜飼いが、始まるのを待つということらしい。

屋形船が六艘か七艘、横並びで停まった。

乗っているお客の種類も、さまざまだった。

どこかの会社の社員たちは、早くも、ビールや酒を飲んで、氣勢を上げたり、立ち上がって歌を歌っている。

木本と有紀が乗った屋形船は、三十人乗りだというが、二十二、三人ほどが乗っている。その中に、五、六人のグループもいれば、木本と

有紀のような、男女のカップルもいる。

木本も船内の椅子や、周りの景色を、ビデオに収めている。

二人は、松花堂弁当に箸をつける前に、ビールで喉を潤すことにした。

「海島さん。鵜飼いは暗くなってから始まるって聞いていたんだけど、どうして、暗くなってからなの？」

木本が、船首にいる海島にきいた。

正式には、船員ということらしいが、印半纏いんはんじょうに、鉢巻はちまきという、粋な格好の二人は、やっぱり、男衆おとこむねという言葉の方が、似合いそうである。

その男衆の海島が、大声で答える。

「皆さんは、よく誤解されるんですよ。鵜飼ういいというのには、篝火かきを焚たきいて、明かりに集まってくるアユを鵜ういを使って獲とるものだと、思っ

らっしやる。違うんです。暗くなるとアユは、石の下で寝るんですよ。そこへ、篝火を焚いた鵜船が来る。急に明るくなって、パチパチ火花が散るから、アユは、びっくりして石の下から飛び出すんですよ。それを鵜がパクリとやる。だから、夜、暗くなつてからが、いいんですよ。それに、夜の篝火つて、きれいだから」

「川沿いに建っている旅館やホテルも、協力してくれるの？」

「ええ。鵜飼いが始まったら、協力してくれますよ。部屋の明かりを消したり、カーテンで、外に洩れないようにして」

「じゃあ、この屋形船の明かりも消すんですか？」

木本がきくと、海島は、笑つた。

「少しだけ、暗くさせて頂きますよ」

次第に、周囲が暗くなつてきた。

今日は、五月の中旬。昼間は暑いくらいだったが、夕方になると、長良川の川面を渡つてくる風は、さすがに、冷たかつた。

突然、火花が上がつた。

「さあ、始まりますよ」

と、海島が、いった。

最初の鵜船が、木本たちの視界に入つてきた。なるほど、今度は、船首を前にして、進んでいく。

船首に篝火が焚かれていて、その火花の弾はじける音が聞こえてくる。

船首に立つた鵜匠が、十本から十二本という紐を持って、それだけの数の鵜を操っている。

時々、ドンドンという音がする。

「あれは、一緒に乗っている船頭が、船板を手

「で、叩いているんですよ」

「どうして、そんなことをするの？」

「音を立てて、鶉を元気づけているんです」

有紀が、カメラを向け、木本は、ビデオをスタンバイし、じっと目を凝らした。

篝火の明かりの中で、鶉が水中に潜ったり、飛び出してきたりする。

鶉匠が、アユを、獲ったと思われる鶉を、紐で引つ張り上げて、船の上で、アユを吐き出させている。

長良川に沿って建っているホテルや旅館も、鶉飼いに合わせて、明かりを、消しているので、篝火を焚いている鶉飼いの船が、絵のように、美しい。

六艘の鶉飼いの船が、次々に現れては、下流に向かって、姿を消していく。

時々、鶉匠が、篝火に薪を投げ込む。そのたびに、パツと、火花が散って、それが、川面に映える。

船板を叩くドンドンという音が、絶え間なく続いている。

有紀が、必死になって、写真撮っていると、それを見兼ねたのか、海島が、

「あとで、一艘だけ近くまで来て、実演を見せますから、その時に写真を、撮ったらいいですよ。そのほうが、いい写真が、撮れますよ」

と、教えてくれた。

なるほど、しばらくして、六艘の鶉船のうちの一艘が、わざわざ、客の乗っている屋形船のそばまで来て、鶉飼いの実演を、見せてくれた。「あとは、絵がらみですね。これは、きれいだから、絵になりますよ」

と、海島が、いう。

「総がらみって、何ですか？」

木本が、きく。

「今までは、ご覧のように、鵜船は、一艘ずつ離れて、下流に、向かって進みながら、鵜を操っていました。最後に、六艘がくつつくようにして、横一直線に、走りながら、鵜飼いをみせるんです」

と、海島が、いった。

周囲は、さらに暗くなった。

その暗さの中で、総がらみが始まった。六艘の鵜船が、重なるように接近して、川面を動きながら、鵜飼いをするのである。

夜の闇の中で、篝火だけが明るく、一筋の帯のように繫つながっている。美しい絵である。

有紀が、その景色を、夢中になって、カメラ

に収めていたとき、突然、船首にいた海島が、座敷の中に、飛び降りてきた。

「危ない！」

有紀が、悲鳴をあげた。海島は、それを、無視したように、いちばん端で眠っているカッパルのそばに、飛んでいって、

「お客さん！」

と、大きな声を出した。

木本が、

「その二人、酔っぱらって、寝ているんだよ。無理に起こして、鵜飼いを、見せることはないよ」

「いや、このお客さん、ちょっとおかしいですよ。酔っぱらって寝ているんじゃないかもしれないよ」

海島は、力を込めて、二人の体を揺さぶって

いるが、カップルは、起き上がる気配がない。

海島は、船尾にいる船長に向かって、

「すぐ救急車を、呼んでください。二人のお客さんの様子が、変なんです」

と、叫んだ。

「救急車？」

と、船長が、のんびりと、きき返す。

海島は、さらに、大きな声で、

「カップルの、お客さんの様子が、おかしいんですよ。至急、救急車をお願いします」と、繰り返した。

船長も、やっと真顔になって、携帯電話で救急車を呼んだ。

木本も、だんだん、そのカップルが、心配になってきて、テーブルに、うつ伏せになっている男女に、目をやった。

男は、おそらく三十五、六歳といったところか。女は、男より一回りは若いだろう。

海島が、いくら、揺すっても、二人は目を覚まそうとは、しなかった。

五、六分して、土手の上に、救急車が二台到着し、四人の救急隊員が、タンカを持って、河川敷を、走ってきた。

救急隊員が、こちらの船に、乗り込んでくると、海島が、

「この二人のお客さん、酔っぱらって、寝ているのかと思っていたら、どうやら、違うみたいなんです。起こそうと思って、いくら体を揺すっても、声をかけても、目を覚まさないんですよ」

と、いった。

救急隊員の一人が、

「このワインのボトルですけど、こちらで用意したものですか？」

「いや、それはたしか、その二人が持ち込んだものですよ」

と、船長が、答える。

もう一人の救急隊員が、テーブルの下から空の瓶びんを拾いあげた。

「この中の物を、飲んだのかな」

と、一人がいい、もう一人が、

「この二人が、料理やお酒以外の物を、口にしているところを、見た人はいませんか？」

と、きく。が、誰も答えなかった。

二人の男女は、救急隊員の用意した二つのタクシーに、乗せられて、運ばれていった。

屋形船の空気が、急に重苦しくなってしまった。それでも、

「まだ、総がらみが続いていますから、ご覧になつてください」

と、海島は、客を盛り上げるように、大きな声で、いった。

木本たちの乗った屋形船は、総がらみが終わると、船着き場に向かつて、動き出した。

二人は、タクシーで、都ホテルに帰ったが、初めて鵜飼いを見たためとは、違った意味で、興奮していた。

木本が、編集長に、電話をかけた。

「今、鵜飼いの取材が終わって、ホテルに帰ってきたところですよ」

「ちゃんと、取材はしたんだろうね？ 写真もすっかり撮ったか？」

編集長が、きく。

「ええ、取材も、ちゃんとやったし、写真も、

きちんと、撮りましたよ。ただ、妙な事件にぶつかりましてね」

木本は、自分たちの乗った屋形船の中で、男女二人が、おかしくなってしまったことを、そのまま、伝えた。

「男は中年で、女は若いんだっただな？」

「そうです。たぶん、男は三十五、六歳じゃないですか。女は二十代ですね」

「心中か？」

「いや、それは、まだ、わかりませんよ」

「わかった。とにかく、明日になったら、さつさと帰ってくるんだ」

編集長は、最後は、決めつけるように、いった。

電話のあと、木本は、夜九時の、テレビのニュースを見たが、問題の、カップルのことは、

報道されなかった。

翌朝、木本は、有紀と一緒に、朝食に行った。「今朝のニュースでやっていたわ」

有紀が、声を落として、木本に、いった。

朝食はバイキングなので、木本は、皿の上に、スクランブルの卵や、海苔<sup>のり</sup>、納豆、ハムなどを載せながら、

「僕も見たよ。テレビでは、無理心中じゃないかと、いつていたな」

警察が、無理心中かもしれないと考え、その線で、調べていると、テレビは、報道していた。

男女の身元は、まだわかっていないらしい。

二人は、岐阜市内のホテルに泊まっていたが、そこに、書いた名前が、いずれも、偽名らしいという。

二人は、並んで朝食を取りながら、

「僕のビデオに倒れた男と女が、ワインを飲んでるところが、映っていたけど、君は、二人の写真、撮っていた？」

木本が、有紀に、きいた。

「たまたま、撮っていたけど、二、三枚だけだったわ」

有紀が、小声で、いった。

「あの二人が、有名人だったら、ウチの雑誌でも、使えるかもな」

「少なくとも、私の知っている人たちじゃないわね」

二人は、朝食を済ませ、ホテルを、チェックアウトすると、タクシーで、岐阜羽島駅に向かった。

東京行き「こだま」に、乗ってからも、木本は、テレビのニュースの時間に合わせて、デ

ッキに行き、携帯の、ワンセグのテレビを見ていた。

席に戻ると、有紀に向かって、

「二人とも、東京の人間らしい」

「名前、わかったの？」

「ああ、これが、その名前だ。地元の警察が、

記者会見で、発表している」

木本は、テレビ画面に出ている二人の名前を、有紀に見せた。

男は、藤本智之ともゆき、三十六歳。女は、水島和江、二十五歳。

「二人とも、有名人じゃなかったわね」

有紀が、いう。

「ああ、そのようだ」

「ホテルでは二人とも、偽名を、使っていたんでしょ？ どうして、本名が、わかったのか

「しら？」

「二人が、運転免許証を、持っていたんだ。それで簡単に、本名が、わかったらしい」

「二人とも、東京の人間なのに、どうして、わざわざ、岐阜まで来て、心中を、図ったのかしら？」

「もしかすると、岐阜が、二人にとっては、思いの場所だったんじゃないのかな？ 長良川の鵜飼いが、二人の思い出に、関係しているのかもしれないな」

と、木本が、いった。

東京に着き、勤務先の出版社に顔を出すと、編集長の田辺が、有紀に向かって、

「心中を図った二人の写真は、撮っていたのか？」

「ええ。二、三枚だけですけど」

「ウチの雑誌に載せるんですか？」

木本が、きくと、

「載せるか載せないかは、これからの、発展次第だな。ただ、平凡な人間の、心中事件のようだからな」

と、田辺は、いった。

だが、心中事件の真相は、曖昧あいまいなままだった。次の日になって、少し事態が動いた。

第一に、二人は、睡眠薬を、ワインに混ぜて、服用し、男が生き残り、女が死んだことが、地元地元の警察から発表された。

二つ目は、男、藤本智之には、涼子という同じ歳の妻がいた。女、水島和江のほうは、独身である。

第三、救急車で病院に運ばれる途中、救急隊員の一人が、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。